

一. 映画

「こんな夢を見た……」

この一節から始まる十の短編を集めた夏目漱石の異色作「夢十夜」。映画「ユメ十夜」は、原作「夢十夜」を十人の個性豊かな監督たちが読み解いた、文字通りのドリーム・エンターテインメントである。

この作品は、十の夢がそれぞれ独立したストーリーを構成したオムニバス形式となっている。ホラー、コメディ、アニメーションなどあらゆる切り口で描かれるが、ここでは第一夜のあらすじを紹介しよう。

作家の百間^{ひやくま}と妻のツグミは、東京・根津の家で平穏に暮らしていた。ツグミは土間の茶店で働き、百間は机に向かって筆は一向に進まず、それどころか時間が逆行しているような感覚を覚える。やがて、茶店から戻ってきたツグミは着物を脱いで横たわり、こうつぶやく。「百年可愛がってくれたんだから、もう百年、待っていてくれますか？」……そして、消え入るように死んでしまう。一人残された百間は……。

原作に比較的忠実なこの第一夜は非常に幻想的で、「ユメ十夜」だけでなく「夢十夜」をも象徴する一篇となっている。その他にも、「呪怨」の清水崇が描く鳥肌モノのホラー・第三夜、日本が誇る彫刻家・運慶と2ちゃんねるが共演する爆笑必至の第六夜など、エキセントリックな作品が数多い。

「余は吾文を以て百代の後に 伝えんと欲する野心家なり」

漱石自身がこう予言したとされるこの摩訶不思議な作品に挑戦したのは、映画監督・演出家とマルチな才能を発揮する松尾スズキ、ファイナルファンタジーシリーズの原画を担当する天野嘉孝など、様々なフィールドから集まった十人の監督たち。それに応える俳優陣には、昨年末オダギリジョーとの結婚が報道された香椎由宇（第三夜）や、デスクの“L”として一躍名を馳せた松山ケンイチ（第十夜）など、ビッグ・ネームが並んでいる。



ユ

メ

十

夜



「夢十夜…… 先生の謎かけ……」

オープニングで戸田恵梨香演じる少女がこうつぶやく。明治の文豪が見た、不条理で幻想的な十の夢。そこに秘められた百年前の問いかけに、あなたは答えることができるだろうか？

二. 原作

映画「ユメ十夜」の原作「夢十夜」は、夏目漱石の作品の中でも異色の作品と言われる短編集である。漱石自身の身のまわりで起こったことやそこで感じた不安や願望が対象化されているという分析もあり、全編を通して不思議な雰囲気や漂わしているが、第六夜など、その裏側にはシュールな皮肉が見え隠れするものもある。

「夢」という特殊な舞台で描かれた「夢十夜」は、「坊っちゃん」「こころ」などで漱石作品に触れてきた人にとっては意外な印象を与えるだろう。ぜひ、一読をお勧めしたい。

三. 夏目漱石

遅咲きの文豪として有名な漱石は、三十八歳から四十九歳までの実質十一年間という短い期間でこれだけ後世に残る作品を生み出したことになるが、もともと政府からイギリス留学を命じられるほど聡明な人物であつたらしく、鎌倉時代の名随筆・「方丈記」を英訳したこともある。ちなみに、その明晰な脳は、いまだに東大で保管されているらしい。

その他にも漱石のエピソードには事欠かないが、実は映画の各シーンにも漱石の人間関係や経験などが反映されている。気になる方は、映画の物語とともに手元の国語便覧もひもといてみてほしい。映画、原作、そして漱石自身をより深く楽しむことができるだろう。（鏡）

はみだし
すてーじ

寒死する……
⇒という夢を見た。

(理・2 敗者)
(第十一夜；編)